

『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』発行にあたって

佐々木 嘉則

『言語文化と日本語教育』の 2004 年増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線』の三冊目を発行する運びとなった。今回は『言語文化と日本語教育』の発行主体である日本言語文化学会の会員からの 8 本の投稿論文を 3 章に分けて収めたのに加え、語彙習得に関する 2 本の講演録ならびにそれに対するコメント・解説記事を掲載している。

第 1 章「語彙の習得」には森美子氏（「語意推測方略の個人差」）・黒沢学氏（「名詞連結からみる第 2 言語語彙の表象と学習」）の講演録およびそれぞれに対する大北葉子氏からのコメント、佐々木嘉則による解説記事（「定量的研究の計画・成果を、リサーチクエスチョンを軸として分析する一技法」）と、吉澤真由美氏のレビュー論文（「L2 読解における incidental vocabulary learning」）を収録した。前号掲載の谷内(2003)が付随的語彙学習 (incidental vocabulary learning) に関する文献を広く概観したものであったのに対し、吉澤氏は読解中の語彙学習に的を絞ってさらに詳細な検討を加えている。

その中で吉澤氏が紹介しているとおおり、Richard Anderson, William Nagy, Patricia Herman ら当時イリノイ大学に集った読解研究の精鋭達が、付随的語彙学習に関して鋭い論考を残している(Nagy, Herman & Anderson 1985; Nagy, Anderson & Herman 1987)。そういった蓄積が、Nagy 門下で学んだ森美子氏による語意推測能力研究の一つの源流となっているといえよう。森氏が主として自身の研究(博士論文研究にもとづく Mori & Nagy(1999)と、学位取得後の第一回研究である Mori(2002)の成果を踏まえ、個々の構成漢字の意味から漢語の意味を推測することは思いの外難しいと報告しているのに対し、大北氏は「四面楚歌」などある種の漢語は語源の知識が理解を助けると指摘している。双方の主張の関係は、構成漢字と語意の関係の緊密さ(意味の透明性)にしたがい漢字熟語を次のようにおおまかに 4 分類するこ

とで理解しやすくなる。

①構成漢字の意味から、自力で語意が推測できる語(例:「湖沼学」)→見ただけで意味がわかるので、語彙学習が最も迅速に進むと予測される。ただし、このタイプの語は一般に思われている(あるいは日本語教師が期待している)ほどには多くない。

②自力で推測するのは難しくても、語意を教えれば納得できる語(例:「外見」)→一度みただけでは語彙学習は起こりにくく、何度か接触(exposure)が必要だろう。語注が学習を促進するかもしれない。このタイプの語はおそらく、かなり多い。

③語意を教えただけでは釈然としないが、説明があれば納得できる語(例:「天井」)→これも一度みただけでは語彙学習は起こりにくいだろう。このタイプの語もおそらく、かなり多い。

④説明を聞いてもなお釈然としない語(例:「幾何」)→習得までには度重なる接触が必要だろう。おそらくこのタイプの語はあまり多くない。

森論文は①とその他(特に②および③)の峻別の必要性を強調し、実験では②と③のタイプの言語素材を多用している。これに対し、一見④のように思える語も語源を知れば③である場合があると指摘しているのが大北氏である。語源的知識の提供が語彙学習を助けるとすれば、その効果が最も高いのはおそらく③のタイプの語だろうと予測できる。したがって、大北氏の指摘は教師や辞書から語源などの情報を得られる場面に適用されるものである。一方、そういったサポートのない読みの場面における語意推測過程のある側面を実験場面で再現しようとしたのが森氏の研究であり、そこから得られた知見と大北氏の指摘とは、理論的にも教育実践への応用という意味でも互いに相補的な関係にあるといえよう。

大北氏の指摘にもあるとおおり、語源的知識の重要性は言語教育者の間でなかば常識とみなされている

が、実は語源に関する知識や推論が語彙学習におよぼす影響を厳密に実証した研究は珍しく、黒沢(1999)はこの論題に先鞭をつけたパイオニア的研究といえる。英語の多義語を素材として氏自身がおこなったこの実験研究を含む国内外の諸研究を本号収録の講演録の中で紹介するに先立ち、黒沢氏はまず語に関する知識は心内でどのように表象されているのか、そもそも「表象」とは何かをめぐる認知心理学理論についてわかりやすく解説している。語彙習得に関心をもつ応用言語学研究者にとっては、レベルの高い認知心理学入門としての役割も果たしてくれる文献である。

2002年におこなわれた黒沢氏の講演の中では、Kroll、松見など2言語併用者の語彙知識に関する様々なモデルが紹介されている。これらのモデルではいずれもL1とL2が同じ意味表象を共有しているのに対し、講演の後で発表されたFinkbiner et al.(2004)のモデルではL1とL2がそれぞれ異なる(ただし部分的には重なる)意味表象の範囲と結びついているとされている。大北氏による黒沢講演録へのコメントでは、このモデルが紹介されている。

森・黒沢両氏の講演録はもちろんそれぞれの研究分野における文献として価値の高いものであるが、同時に、通常の学術雑誌における研究報告では触れられることの少ない研究動機や研究者自身の意志決定の過程にも言及しているので、それぞれの卓抜な研究デザインと相俟って研究方法論を学ぶ上でも有益な教材となる。この特質に着目し、本稿筆者が担当する修士(博士前期)課程1年生向けの授業では開講早々に、リサーチクエストのたて方・研究デザインの組み方のお手本としてこれらの講演録を講読させている。

そういう目的でこれらの講演録を読む読者を念頭におき、「ここに注目して読んでほしい」といういわばスタディガイドを意図したのが拙稿「定量的研究の計画・成果を、リサーチクエストを軸として分析する一技法」である。研究者養成にあたる先生方には、独立専攻大学院における研究方法論教育の一実践例として御笑覧いただければと思う。

さて、それに続く第2章「文法の習得」は四本の

レビューを収録している。このうち菅谷奈津恵氏(「第二言語の生産的言語能力獲得におけるかたまりの役割」と向山陽子氏(「文法指導の効果に関する実験研究概観」)はそれぞれ、定式表現と明示的教示が文法習得に果たす役割に関する一般理論を指向した論考である。これに対し、高橋織恵氏(「連体修飾構造の習得過程に関する研究概観」)と尹喜貞氏(「第二言語としての日本語の授受動詞習得研究概観」)はそれぞれ日本語学習者が誤用を頻発することで知られている言語形式の習得に関する先行研究を網羅的にレビューしている。前々号および前号で大関(齋藤)浩美氏(2002, 2003)が統語論的な観点を踏まえて名詞修飾節の習得研究を概観したのに対し、今回の高橋氏の論文は「の」の過剰使用(「おいしいの魚」など)を中心として、名詞を修飾する「語」の形態論の習得を論じたものである。

第3章「習得理論と教育実践」は、スキル領域(「第2言語における聴解ストラテジー研究」——横山紀子氏)、レジスター(「日本語教育のためのビジネス・コミュニケーション研究」——近藤彩氏)、対象者の年齢(「日本語以外の言語を母語とする言語少数派の子どもへの学習支援における二言語併用の役割」——朱桂栄氏)において特化された言語使用とその教育を論じている。

なお今号より、各収録論文の構成を章・節・項のレベルまで記載した「詳細目次」をそれぞれの論文の前に付することにした。これは特にこれからレビュー執筆に挑戦する若手研究者の参考に供することを考え、完成品のレビュー論文の構造を明示的に示すことにより「レビューとはどのように組み立てたらいいか」を実例から学んでいただくという意図に発している。「詳細目次」と「要旨」を照らし合わせながら読むと、それぞれの著者の意図がより明確につかめると思う。

最後に、このレビュー論文集シリーズに関する情報が下記のホームページに収録されていることは前号でもお知らせしたとおりである。今後とも随時充実していく予定であるので、折に触れてご覧いただければ幸甚である。

追記

前号(2003年版)発行以降、黒滝真理子・辛昭静の両氏がめでたく博士号を取得した。この2名(いずれも2002年版に論文を掲載)を含め、2002年版および2003年版にレビュー論文が掲載された二十数名の博士後期課程の大学院生のうち計8名がその後、最高学位にまでたどりついたことになる。(因みに、前々号に掲載の池田玲子氏と今号掲載の近藤彩氏は、それぞれ投稿時に既に学位取得済み。)

こういった実績からも、レビュー論文の執筆という負荷の高い(= challenging な)課題に全力で取り組むことが博士後期課程における集中強化訓練法(専門家としての識見のいわば「筋力トレーニング」)の一つとして効果的であることが示されたように思われる。

一方、2003年版に掲載された白井恭弘氏の講演録「第二言語習得研究とは何か」はその後さらに改稿加筆のうえ、生命科学・認知科学・脳科学の啓蒙書を多数収録していることで知られる岩波科学ライブラリーの100巻目として2004年の秋に出版された(白井2004²)。利根川進博士(1987年ノーベル生理学・医学賞受賞)をはじめ我が国を代表する錚々たる科学者達がずらりと執筆陣に名を連ねる同ライブラリーに同書が加えられたことは、第二言語習得論が認知科学の重要な研究領域の一つとして認知されたことの一つの証ともいえる。その出版のきっかけを作ったのがこの『第二言語習得・教育の研究最前線』シリーズであったことを喜ばしく思う。

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった23名の査読協力者の先生方、初年度(2002年)以来継続的に企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘・長友和彦・森山新の各氏に深く御礼申し上げる。編集事務局実行委員の高橋織恵・向山陽子・尹喜貞・吉澤真由美の四氏(いずれも本号に論文を掲載)には装丁企画・執筆者との連絡調整・書式点検・校正などの実務に御活躍いただいた。掲載が決まった投稿論文をフォトレディー版に成形する作業は当初、基本的にはそれぞれの執筆者の責任でおこなうこととなっていたが、実行委員には主として不統一箇所の点検や修正指示などを通じ、また時には「レスキューチーム」として執筆者をサポートしていただいた。野々口ちとせ

氏(日本語教育コース助手)および前々号実行委員の谷内美智子氏からも実務作業に関してさまざまな助言と技術指導・ノウハウ提供を含む御助力をいただいた。2本の講演録の文字化にあたっては、谷内美智子氏、徳田恵氏にご尽力いただいた。Richa Ohri氏からは、英文目次の準備にあたって協力を仰いだ。木山三佳氏には経理・発送事務等の元締めとしてこのプロジェクトを背後から支えていただいている。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社と、今回も厳しいスケジュールの中、迅速に印刷製本作業を進めてくださった平河工業社にも感謝申し上げたい。なお、前号同様、本号の刊行も日本語習得・教育に関する研究のレビュー論文集編纂を目的とする長期プロジェクトの一環であり、このプロジェクトは2002年度から文部科学省科学研究費補助金の助成を受けている³。

注

1. 実際にはこれらの分類は連続的で、明確な境界線を引くことはできない。
2. 佐々木(2004)による書評が以下に転載されている。
<http://people.cornell.edu/pages/ys54/iwanami.html>
3. 「第二言語としての日本語習得研究のレビュー論文集編纂と刊行・オンライン配信」基盤研究(C)(2)2002-2004年度 課題番号14580326 研究代表者 佐々木嘉則

参考文献

- 黒沢学 (1999) 「訳語間の派生関係について推論を求める 教示が外国語彙量の獲得に及ぼす影響」『教育心理学研究』47, 364-373.
- 齋藤(大関)浩美 (2002) 「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会 45-69.
- 大関浩美 (2003) 「なにが関係節習得の難易を決めるのか：研究の動向および日本語習得研究への示唆」『第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』日本言語文化学会 32-50.
- 佐々木嘉則 (2004) 「新刊紹介『外国語学習に成功する人、しない人』」『第二言語としての日本語の習得研究 7号』263-264.
- 白井恭弘 (2004) 『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得論への招待—』岩波書店
- 谷内美智子 (2003) 「付随的語彙学習に関する研究の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』日本言語文化学会 78-95.
- Mori, Y. (2002) Individual differences in integrating information from word parts and context in interpreting novel words, *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.

Mori, Y. & Nagy, W. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

Nagy, W., Herman, P. & Anderson, R. (1985) Learning words from context, *Reading Research Quarterly*, 20, 233-253.

Nagy, W., Anderson, R. & Herman, P. (1987) Learning word meanings from context during normal reading, *American Educational Research Journal*, 24, 237-270.

ささき よしのり／お茶の水女子大学